慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佐藤春夫に見る幸徳事件の影響について：反発と恐懼を中心に
Sub Title	Fear and trembling or indignation? : Japan's treason incident in the mind of the novelist Haruo Satō
Author	玉井, 清(Tamai, Kiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2023
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.96, No.2 (2023. 2) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大山耕輔教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20230228-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佐藤春夫に見る幸徳事件の影響について

――反発と恐懼を中心に――

玉井　清

序
第一章　生い立ちと故郷「新宮」について
第二章　幸徳事件と「愚者の死」について
第三章　幸徳事件をめぐる永井荷風の転換
結　語

序

昭和一六（一九四一）年一二月の真珠湾攻撃により日米戦争が勃発した。日本軍は、緒戦こそ攻勢を見せたものの翌一七年六月のミッドウェー海戦を転機に米軍の反攻を受け劣勢に立たされていく。同年末の一二月に決定され翌一八年初頭にかけ実施された西太平洋上のソロモン諸島ガダルカナル島からの撤退は、日本軍劣勢の事実を隠すことができなくなり国民に公にしなければならない出来事であった。この日本軍の後退を糊塗し戦意高揚

を図るべく展開されたのが、昭和一八（一九四三）年三月一〇日の陸軍記念日を期して行われた「撃ちてし止まむ」の運動であった。ここでは、鬼畜米英の標語に象徴されるような敵米英の残虐性が殊更強調されることになる。[1]

この「撃ちてし止まむ」の運動下、新聞各紙も競い合うかのように種々の特集を組むことになるが、[2]『毎日新聞』は「愛国百人一首」編纂を主催したことに象徴されるように文壇と近い関係にあったため「撃ちてし止まむ」の題目の下、著名な詩歌人を動員する一四回の連載を企画した。[3]詩や短歌はもとより、俳句、川柳、小説の分野で活躍する文人も含めた二五名が作品を寄せたが、そのトップに起用されたのが佐藤春夫であった。[4]

日米開戦に先立つ昭和一四（一九三九）年一〇月、佐藤は「経国文芸の会」を立ち上げていたが、[5]同会に参加した齋藤瀏が、「日本文芸をわが国体、及啓国の精神に徹底した本来道に立たしむ」ことを目指していたと記すように、[6]昭和一二年七月に勃発した日中戦争以降、推進された戦時体制強化に即応する文化団体であった。同一五年七月、近衛文麿が首相に返り咲き第二次近衛内閣が発足すると、近衛新体制運動の掛け声の下、各分野の組織統合が推進されることになるが、文壇も例外でなく同年一〇月に結成された大政翼賛会に連動して「日本文芸中央会（以下、中央会と略）」が創立される。[7]既存政党の大政翼賛会への糾合が促進されたように、各種文芸団体の中央会への統合が促進されたのであるが、これに先陣を切って参集したのが「経国文芸の会」であった。[8]こうした文壇の統合は、日米開戦以降、より一層強化されることになる。中央会への参加は組織の解散を前提としていなかったため、その発展的解消が改めて求められ一七年五月の日本文学報国会結成に至る。しかし、既存の文芸団体の解消や統合をめぐっては、種々の抵抗があり円滑には進まない状況が生まれていた。[9]そうした状況下、早期に解散を決定し合流したのが佐藤率いる「経国文芸の会」であった。[10]戦時体制強化のための文壇統合の動きの中で、同会は先陣を切る役割を果たしたことになる。

他方、日中戦争勃発から一年余を経た昭和一三年九月、佐藤は海軍の要請を受け従軍作家（ペン部隊）の一員として大陸に渡り戦地報告記を著したように、戦時が求める多くの関連作品を世に出す作家として脚光を浴びることになる。[11] 日本文学報国会結成時の一五名の理事に詩部会を代表し就任もしていた。[12] こうした経歴に鑑みれば、佐藤は、日米開戦後の「撃ちてし止まむ」の新聞連載の冒頭に起用されるに恰好の文士であった。この連載に寄稿された詩を含め、戦時下に創作された佐藤の作品を通じ、彼の戦時即応の実際を解き明かすことを目指すが、本稿では、その前段の考察として、以下の問題意識から戦時を迎える以前の文人佐藤に注目する。

佐藤は、大正中葉に作家として世に知られるようになるが、戦時を迎える以前、すなわち昭和初頭までの彼の著作を概観する限り、自らの作品に政治や社会問題を積極的に呼び込む作家ではなかったことがわかる。佐藤は、そうした世俗の問題とは一線を画す、むしろ遠ざけようとする、さらに言うなら世俗から超然とすることに芸術家としての理想を見ようとする文士であった。この種の作家は、社会主義や共産主義に傾倒するプロレタリア作家とは異なり、統治者から見れば危険少なき文人であったが、日中戦争が勃発し戦時の時代を迎えると、異なる意味で苦しい立場に置かれていくことになる。戦時は政治や社会問題が世を蔽い、文人にも種々の要請を行うことになるが、[13] 佐藤のように世俗から超然とする創作姿勢は、戦時から超然としていることを意味するようになるからである。時局に超然としている文人は、「文弱」と卑称され、その無関心や無頓着ぶりがしばしば糾弾されたのである。[14] 文壇に登場して以降、世俗から一線を画し人間の内面に執心する作品を世に出していたかに見える佐藤は、時局の風潮に乗ることに抗い、あるいは逡巡することにより批判を受ける可能性がある作家の典型であった。

しかし、佐藤は戦時を迎えると、従前の立場を放棄したかのような活動を展開することになる。既述したように戦時の要求に積極的に応える言動を展開することにより、時局の先陣を切る作家として脚光を浴びた。その変

貌ぶりは、文壇内外の戸惑いと困惑をも生み出すほどであった。[15] 時代や体制を問わず、戦時への即応は「個」を制約することになり、本来なら佐藤が最も抗うべき瞬間であったはずである。多くの作家は、その対処に苦悩を抱えることになるが、結論を先取りすると佐藤に関して言えば、そうした葛藤の痕跡を見出すことが困難である。一見すると、苦悩や葛藤は、ないままに大胆な転換を果たしたように見える。

かかる転換前後の内実を追いながら、既述したように日米開戦前後を通じた佐藤の戦時対応の実際を解き明かした上で、『毎日』の連載企画「撃ちてし止まむ」に寄稿された彼の作品を位置づけることを目指してみたい。本稿では、その緒言の研究として、彼の生い立ちから幼少青年期を経て文壇で認められるようになるまでの時期を射程に置き、特に幸徳事件の影響を中心に検証してみたい。[16]

第一章　生い立ちと故郷「新宮」について

明治二五（一八九二）年、佐藤春夫は和歌山県東牟婁郡新宮町に、医師の父豊太郎、母政代の長男として生まれる。明治三一年に新宮尋常小学校、三五年に新宮高等小学校に入学し、同三七年に同校を卒業するとともに和歌山県立新宮中学に入学する。小学校に入学したのは日清戦争後であったが、毎年一一月三日の天長節を期して開催される運動会では、日章旗と軍艦旗の半紙大の旗竿を持って「勇敢なる水兵」を歌いながら行進し、[17] 連隊旗を一面に表紙図案にしていた絵本で遊んでいた。[18] 中学時代の日露戦争に際しては、日本の勝利に歓喜したことを日記に記す同時代の典型的な少年であった。[19]

一方、新宮は城下町として栄え、熊野の森を背にしていたこともあり材木商の街であったが、日清、日露の戦争に際しては、戦時需要もあり非常に景気がよく豊かな街になっていた。そうした生活の余裕からか文学熱が盛

んで、俳諧、和歌、狂歌が行われる気風があり、加えて急進思想やキリスト教が田舎としては非常に早く入っていた。[20] 社会主義に共鳴し牧師として宗教活動を続けながら小説を書くため住み着いていた沖野岩三郎や、アメリカ帰りの医師で同じく社会主義に傾倒していた大石誠之助は、その典型であった。大石は、春夫の友人西村伊作の叔父にあたり「禄亭」の号を持つほどの文人でもあったが、彼の下には、日露戦争中に雌伏して地方に身を隠す社会主義者が頼りとし、東京から町に出入りしていたので一種異様な都会の逸民らしい風俗が町に生まれていた。[21]

新宮で医院を開いていた父豊太郎も、詩歌や随筆を読むだけでなく書くほどに文学を嗜む知識人であった。[22] こうした父の影響もあり春夫も読書好きの幼少青年期を過ごす。入院している患者に差し入れられた書籍から、巌谷小波編纂の日本と世界の御伽噺シリーズや木村鷹太郎訳のバイロンの『海賊』を読破する。[23] 姉が読んでいた『少女世界』に掲載された国木田独歩の「春の鳥」を読み、彼の作品は「武蔵野」まで手当たり次第に読み、小川未明、鈴木三重吉も好きであったという。田舎町の一軒しかない本屋で文学書ばかりを求め、『文章世界』、『中央公論』、『早稲田文学』、『趣味』の月極購読者になっていたので、全盛期の田山花袋や売り出し中の正宗白鳥らを喜んで読み、自然主義の読者の急先鋒になっていた。[24] 当時、文学書を読むことは学校でも家庭でも禁忌の雰囲気がある中、この種の本ばかり読んでばかりいたため代数幾何の点数が足りず中学を留年することになる。[25] 留年は親の不興を買うことになり文芸書を求めることができなくなったため、参考書に混ぜて注文したり家から無断で金銭を持ち出したりして購入することまでしていた。[26] また、新宮には新詩社[27]の同人が二三名いた縁で、中学三年頃から詩歌人の真似をし『明星』[28]にも作品が掲載され小説も書く気で読んでいた。

佐藤は、右に紹介した新宮独特ともいえる知的空間の中で青年期を過ごすが、中学校の帰り途に立ち寄った「新聞雑誌閲覧所」は、それを象徴していた。西村、大石、沖野ら新宮の有志が読み終えた書物に、一般向きの

読み物を加えた閲覧所を開設していたのである。[29] ここには、『平民新聞』、『萬朝報』、『二六新報』、『中央公論』、『家庭雑誌』、『火鞭』、『直言』、『天鼓』などの社会主義系を含む新聞雑誌やパンフレット、キリスト教関係の雑誌、木下尚江の『火の柱』や『良人の自白』、あるいは『平民科学』などの書籍が置かれていた。[30] 佐藤は、『平民新聞』や『火鞭』の社会主義系新聞、[31] 雑誌、パンフレット、『中央公論』などを手にとり、[32] 特に木下尚江の作品や白柳秀湖の美文調の評論を読み、『平民新聞』に掲載された竹下夢二の挿絵を好んで見ていた。[33]

このように文学熱が高かった新宮には、著名な文人が立ち寄る機会も多く、明治四二年八月下旬、与謝野鉄幹が、生田長江、石井柏亭の二人を帯同して新宮に講演旅行に訪れることになる。この講演の前座として急遽演壇に立つことになった佐藤は、自然主義文学批評家の口吻を使いながら、[34] 日頃の学校教育への不満を、忠君愛国の非文化的教育を、批判した。こうした語調の演説を聴講した者の中から、生意気な不良学生が虚無主義、社会主義の思想を宣伝したとの密告が学校にあり、[35] 佐藤は無期停学処分を受けることになる。[36] その後、学校内では多数の生徒を巻き込む同盟罷業が起こり、騒動の首領に擬せられることにもなる。さらに学校の教室が放火される事件も起こるが、一連の騒動に嫌気がさした佐藤は、一時上京し故郷を離れていたので難を逃れることになる。[37]

明治四三年三月、佐藤は無期停学の懲戒を解かれ卒業に至るが、「自分は早く中学三年頃から教育に対する疑念を抱き、一、二年後はそれがはつきりと不信になつた。」と回想しているように、この停学処分を含めた一連の経験は、既成の学校教育への根深い不信を佐藤に抱かせることになる。[38] 他方、停学中、故郷では危険思想家との烙印を押され、わけもわからず非難の目が向けられる異端者になってしまう。[39] 当時の佐藤は、「『我』の無き人きね歌をよむことにまされる恥を未だ知らなく」、「『金次郎』“HARAKIRI”を説く教師等に呪はるるこそ嬉しけれ」、「この国の歴史のなかに天幕の若き異端のおもしろきかな」と短歌に読み、[40] 孤独と寂しさを一方で抱きながらも、他方において、自分を疎外する「我のなき人」を恥とみて、「金次郎やＨＡＲＡＫＩＲＩ」を通じて旧道

徳を教える教師がいる学校から呪われることは、むしろ嬉しいことであると皮肉り達観さえしていた。[41]「二宮金次郎」や「腹切り」の中に美徳を見出す教育は「我なき人」を養成する旧道徳に呪縛された教育と切り捨てていた。[42]

第二章　幸徳事件と「愚者の死」について

佐藤は、明治四三（一九一〇）年三月に中学卒業後、同年四月に上京し、七月には第一高等学校を受験するものの試験を途中で放棄し、九月に慶應義塾文学科の予科に入学することになる。[43]佐藤が上京した直後の四三年五月、明治天皇暗殺事件が発覚し検挙が開始され慶應入学後の翌四四年一月、幸徳秋水を始めとする一一名が刑死した。大逆事件、いわゆる幸徳事件が世を震撼させることになる。

この幸徳事件で前出の大石誠之助は死罪となり、大石以外にも新宮からは少なからぬ者が罪に問われることになったため、佐藤の故郷は事件の策源地の一つと目されることになる。大石は医師であったため、同業の父と交友があり春夫も面識のある人物であった。事件の報道を受け父親は、大石よりクロポトキンの『麺麭の略取』を借りていたこと、春夫がそれを書斎から持ちだして読んでいると知って慌てて取り戻し、その隠匿場所に困るほどの狼狽ぶりを見せたという。[44]さらに、既述の中学校での放火に至る一大罷業は、大石誠之助の許に来ていた若い社会主義者が画策し起こさせたとされ、大逆事件の前哨戦のようなものと捉えられることにもなる。[45]幸徳らの死刑判決は、慶應予科在学時の東京にて新聞の号外を通じて知り、次の「愚者の死」を同夜に草し、処刑後に加筆し明治四三年三月の『スバル』誌上に掲載された。[46]

「愚者の死」

「千九百十一年一月二十三日／大石誠之助は殺されたり。／／げに厳粛なる多数者の規約を／裏切る者は殺さるべきかな。／／死を賭して遊戯を思ひ、／民俗の歴史を知らず、／日本人ならざる者／愚かなる者は殺されたり。／「偽より出し真実なり」と／／われらの郷里は紀州新宮。／巣の郷里もわれらの町。／／聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる／紀州新宮の町は恐懼せりと。／うべさかしかる商人の町は欺かん、／—町民は慎めよ。教師らは国の歴史を更にまた説けよ。／／」

佐藤は作家として世に知られるようになった大正中葉、初めて活字になった作品とその時の感想を問うアンケートに答え、この「愚者の詩」を敢えて挙げている。[47] 初めて「い、活字になつたのは」当該作品としながら、『スバル』に掲載されたのは専ら与謝野先生の好意からであったとする。[48] さらに、その時の感想について、「私は活字になつた自分のものを見ても（生意気にも）別だん非常に嬉しいとは思はなかったやうに思ひます。今格別な思ひ出のないところを見ますと……。」と、記してもいた。[49]

「い、活字」という文言は、意味を解しにくい表現であるが、自らの心情を紡ぐことのできた満足のいく作品であったということであろう。昭和初頭に出版された書籍の略歴の中でも、佐藤は「十九歳の時大逆事件に連座して刑死せる郷人を歌へる一詩が雑誌スバルに採用され」たと特記している。その一方で、「その後、三田文学その他二三の同人雑誌に於て、幼稚なる試作を発表してきた」とも付言している。[50]「愚者の死」も「幼稚なる試作」の一作品ということになる。先の「特段の感激はなかった」とともに、佐藤の謙遜から発した辞であろうが、同時に結果として「愚者の死」の相対化、埋没化が図られることになる。この相対化と埋没化は、幸徳事件に関連することへの危険回避と捉えることもでき、そうした自制は「愚者の死」自体にも読み解くことができる。

まず、注目すべきは、大石を敢えて「愚者」と表現していることである。表面的には、大石を貶める表現に見えるが、それが反語的意味を持つことは明らかである。後述するように佐藤が他に記していた内容と照応すれば、そこには大石への同情と共感が内包されていて、自らの信念を只管に貫くことへの敬意を込めた「愚直」と読み代えることもできる。しかし、題目に大石を敢えて「愚者」と形容することにより危険回避が図られている。

さらに、大石誠之助の死について「殺されたり」と挑発的とも言える文言を一方で使いながら、他方において受動形が使われていることにも注視すべきであろう。これにより大石を殺した主体は明確になっていない。仮に、能動形を使うなら、殺した主体を明記する必要が出て、「国家」や「政府」になるはずである。しかし、これらを主語に置くことは、同時代の言論空間を考慮すれば危険を伴うことであったろう。ましてや、社会主義に心酔しているわけでもなく、国家や政府への反抗を強く抱いているわけでもない青年佐藤が、それらを主語に想定することが躊躇されたのは当然であろう。そもそも、「国家」や「政府」など、実感を伴わない政治の抽象概念は、青年佐藤の詩相の中にはなかったであろう。

詩の中で大石を殺した主体を敢えて探すならば「多数者の規約」である。詩に見える「日本人ならざる者」などとともに「多数者の規約」には、同時期に佐藤が接していた[51]ニーチェの思想の中で説かれていた「超人論」の影響を見ることができる[52]。佐藤は、ニーチェをして日本人の全生活を否定するゆえ危険な思想家と位置付けながら、そのニーチェに依拠しながら、泣く子と地頭には勝てぬ、長いものに巻かれてきた歴史、あきらめの文化や宗教が、日本社会の基底にあることを問題視する[53]。日本社会は「末人」の世界であり、ニーチェが説く「超人」の生き方や考え方とは対極に位置すると考える。すなわち、ニーチェは「危険と遊戯を愛する者」を真の男性としたのに対し、危険に立ち向かうことなくあきらめる宗教、前出の短歌に見えるように自害（HARAKIRI）するのが日本の習俗であるが、これはニーチェの説く「超人」とは対極に位置する「末人」の世界となる。したがっ

て、日本人が「超人」を目指すならば、他の国の人々より遙かに険しく遠い、日本人を脱却することから始めなければならないとまで切言する。これが佐藤の説く日本人脱却論であるが、「愚者の死」の基底に、これらの理念を窺うことができる。

大石は厳粛なる「多数者の規約」を裏切り、「民俗の歴史」を知らぬ日本人ならざる愚者ゆえ、殺されたことになる。ここで佐藤が、人類学的な分類を示す「民族」でなく文化や慣習の共有を意味する「民俗」と書いていることにも注目すべきであろう。「多数者の規約」や「民俗の歴史」は、既述したように自然主義運動が打破すべき対象としていた「習俗」より類推できる概念であり、殆ど同義に捉えてもよいであろう。佐藤の前に立ちはだかるのは、日本の歴史の中で育まれた伝統や慣習を総称する「習俗」であり、それを基底に置く日本社会と言ってよいであろう。

このことは中学校での理不尽と思える無期停学処分を受けたことや、自らを危険人物として異端視した故郷の「ムラ社会」を前にして、より実感できることであった。さらに、この中学校での体験が、社会主義思想を封じ自由な言論を抑制しようとする教育機関への不信と批判を増幅させたことは、故郷の父に宛てた書簡を紐解くとより明らかになる。既述のように佐藤は一高受験を途中で放棄したが、これを弁じる書簡の中で高等学校に進学しない理由を列挙しつつ、痛烈な学校教育批判を行っていた。批判の矛先は、高等学校を始めとする教育機関の体質へ、特に官立の学校に向けられることになるが、幸徳事件に連関した出来事にも言及していることは興味深い。[54]

例えば、現今の学校教育の権化ともいえる高等学校では、制服制帽を強制し、校風という多数勢力の下で個人を尊重しない教育空間が形成されているとする。さらに、鷗外の小説を禁止した[55]文部省の直轄下にあるのが高等学校で、尊敬されるべき二七名の名士が講演のための招聘不可の対象とされ、[56]帝国大学の図書館では社会主義の

書籍の貸し出しも禁止された。佐藤は「堪えがたき哉、官僚の臭」と切り捨て、高等学校と帝国大学は文学を究めようとする者にとり何等権威なく、その陋習を破るため退学を期しての高等学校入学なら試みてもよいとの皮肉で結んでいる。[57]

ここには、教育現場で社会主義を危険な思想として封じ込めようとしていることへの反発や、憤懣の情が赤裸々に語られている。特に、第一高等学校ついて「最近、徳富健次郎氏の意義ある演説に報ゆるに鉄拳を以てせんとせし生徒の学校なり」と、書簡の中で記していたことは注視すべきであろう。佐藤が書いた「意義ある演説」とは、明治四四年二月一日、一高弁論部主催の講演会で「謀反論」と題し行われた徳富健次郎（蘆花）の演説であった。大逆事件直後であるため、事件に関連した不穏な内容であると物議を醸すことになったのである。[58] 演説を許した学校の管理責任が問われ、一高校長であった新渡戸稲造の責任問題にまで発展し、新渡戸は進退伺いを出すまでに至る。校長の新渡戸は、一切の責任を引き受ける覚悟で、演者の徳冨や主催した弁論部を難じるより、むしろ擁護する姿勢を示していたため、[59] 佐藤が指摘するように学校自体が鉄拳を加えたわけでない。[60] しかし、彼の憤懣は、そうした事実を吹き飛ばしていた。

公開を前提としていない父親宛ての私的書簡ゆえ本音が赤裸々に書き記されている。その内容は一高批判に止まらず、大逆罪で死刑に処せられた幸徳事件への憤懣と社会主義思想擁護とも解される内容を含んでいる。既述したように死罪となった大石は、同郷の新宮出身であり父と交友があり面識があっただけに、幸徳事件は二十歳前の感受性豊かな青年に、憤懣を抱かせるに充分な衝撃的な事件であった。「愚者の死」は、「故郷新宮は事件に恐懼している、教師らは国の歴史を更にまた説けよ。」と結んでいる。既存の教育機関に根深い不信を抱いていた佐藤からの最大限の皮肉と解してよいであろう。幸徳事件への反発や憤懣は、中学校での自らの体験を重ね合わせることにより実感を持ちながら増幅されていたことがわかる。

この幸徳事件への反発は、佐藤の中で長く残り続けることになる。戦後佐藤は、「大逆事件の地元にいた自分は、またこの事件によつて狡猾に考案された社会機構と社会悪の許すべからざることを感得した。これ等の未熟な青年期の心緒は新詩社のロマンティシズムと混交して、自分の初期の詩を成している。[61]」と記す。「愚者の死」は、その典型と位置づけてよいであろう。

こうした幸徳事件への憤懣が佐藤の胸中で根強く維持されていたことは、佐藤が晩年に書いた自伝的小説を通じても確認できる。この小説は、佐藤と目される主人公須藤と、競合対立しながらも親友となる崎山との交流を中心に展開されるが、崎山は、佐藤自ら記すように小説の中に作り上げた架空の人物であった。その崎山は、小説の末尾で、大逆事件に連座したとして死刑を求刑されるが天皇の恩赦で無期懲役になる。その崎山ついて「僕があばら骨一本を抜いて僕の胸中に生み、そうして真実の大逆事件という社会機構の毒蛇の口に泣きながら人身御供に捧げるために僕が愛し育てて来た象徴的人物なのである。」と解説している。[62]続けて「然らば真実の大逆事件とは何か。当時、天皇は神聖にして犯すべからずと法で定められていた。その天皇を、事もあろうに暗殺などとあるまじき不敬罪を種に国民を煙にまいて、天皇を支配階級擁護の具に供し、あまつさえ天皇陛下の赤子十二人の虐殺を国家の権威を借りて断行した事件で、こういう過激な事件を醸造した時の政府とその手先の裁判官どもこそ真実の大逆罪と、僕は信じている。[63]」と、憤懣の情を露わにしていた。戦後の自伝的小説を書く中で、明治末に起こった事件について、ここまで感情に走る書き込みを行っていることは注目すべきであろう。

このように幸徳事件は佐藤に反発と憤懣をもたらし続けることになるが、同時に、事件を安易に扱うことへの危険や脅威を感じさせ、社会問題を扱うこと、あるいは社会主義に接近することへ抑制をかけることにもなる。先の「愚者の死」の中で、「紀州新宮の町は恐懼せり」と書いていたが、佐藤も恐懼する一人であった。彼は、悔恨の情を滲ませながら、戦後次のように書いている。すなわち、幸徳事件のお灸が身にしみて「その後も左翼

思想には、思想としては同感しても、実践運動は絶対乗り出せなくなった。[64]」、あるいは「大逆事件は、その後久しくわたくしに社会主義に対する疑惑の多くを感じさせながら、同時に敢然として起つ勇気をも奪ひ去つた。私が生涯、観念的にはいつもプロレタリアの味方でありながら、つひぞ実行運動に携はらず、義ヲ見テナサザル勇気無キ人物となつてゐる[65]」と自嘲気味に回想する。

さらに、幸徳事件への恐懼は、佐藤の創作志向に転換をもたらすことになる。佐藤を「義を見てなさざる勇気無き人物」にし、「懦弱な自分の性格は一命を賭して社会悪とたたかう代りに人間の蒙昧を内面的に啓発する方向に向かわせ[66]」ることになる。幸徳事件は、佐藤をして自然主義や社会主義が題材にするような社会問題ではなく、人間の内面の問題を専ら主対象に置く創作へと導くことになる。大正一〇年に刊行した処女詩集の「自序」の中で、佐藤は詩作を始めて以来、一半は抒情詩、一半は当時のわが一面を表はして社会問題に対する傾向詩であったと書きながら[67]、本詩集には、前者の抒情詩だけが所収され、後者の傾向詩[68]は所収されていない。

第三章　幸徳事件をめぐる永井荷風の転換

既述のように幸徳事件への恐懼は、佐藤をして自然主義や社会主義から距離を置き人間の内面を啓発する創作へと導くことになるが、事件への脅威が作家の創作に影響を与えたことは佐藤が敬意を抱く永井荷風にも見ることができた。既述したように佐藤は慶應義塾文学科の予科に進学することになるが、その理由は永井の『あめりか物語』を読んで感銘を受けたからであった。明治四〇（一九〇七）年、米仏留学を終え帰国した永井が、翌四一年に公刊したのが『あめりか物語』であった。同著に出会った佐藤の中学時代は、自然主義運動隆盛の時代であったが、ゾラ研究や『地獄の花』等によってその運動の烽火を上げた第一人者であったと佐藤は永井を位置づ

けている。[69] その永井は上田敏と森鷗外の推挙があり、四三年より慶應の教壇に立つことになる。これは佐藤が、一高受験を途中放棄し、慶應に入学する時期に重なり、彼は堀口大學とともに慶應進学を決意するが、[70] その理由は「荷風の清輝を浴びる機会を把むため」[71]であった。

このように佐藤が敬愛した永井は、幸徳事件を契機に従前とは異なる創作を志向するようになる。その転換にはその直前にフランスで起こったドレフュス事件が影響していた。同事件は、陸軍大尉ドレフュスがスパイ容疑で逮捕されたことに端を発する。この逮捕は、ユダヤ人差別が生んだ冤罪と抗議の声を上げたのが自然主義文学者エミール・ゾラらであったが、彼らの糾弾運動は、ドレフュスの無罪判決を勝ち取ることになる。他方、同時期に日本では幸徳事件が起きるが、永井はゾラのドレフュス事件とは対照的とも言える対応をとったことから自己嫌悪に陥り、それを契機に創作志向を転換させることになる。文学者の社会問題への関与の在り方が議論された時、佐藤は永井のかかる転換について論及している。敬愛する永井についてであるため、名指しはせず婉曲表現を用いつつも、次のように論じていた。

> 国家と家庭との保護奨励に待つことなしに市井に、蛆の如く發生した戯作者の忍従と、遊戯三昧の態度も亦我等現代作家の一典型にならんとしつつあるのは、『地獄の花』以來、最も社会的関心に富み、文明批評の何者なるかを知つてゐた一代の作者が明治末の或る年大久保監獄に出入する或る囚人馬車を見て以來、日本の文人は所詮ドレフイユウス事件におけるゾラの如くであり得ないのを痛感した結果であるといふ悲痛な一例によつて窺知し得られる筈である。[72]

ここで佐藤が「最も社会的関心に富み、文明批評の何者なるかを知つてゐた一代の作者」とは、永井荷風のことである。永井は、『地獄の花』で世に知られることになるが、同時期の自らの作品は全てゾラの模倣であると言うほどの影響を受けていた。[73] 大久保監獄に出入りした囚人馬車は幸徳事件のためのものであり、それを目撃してもゾラのように抗議の声を上げることができず挫折を味わう。以後、永井は政治や社会問題を扱うことから距

離を置き、佐藤の表現を借りれば、国家や家庭の保護を期待せず、市井に蛆の如く発生した戯作者の忍従と、遊戯三昧の態度を示す「我等現代作家の一典型」となっていた。

この佐藤の解説通り、永井は幸徳事件を契機に自らの創作志向を転換させたことを、自作の小説「花火」の中で次のように書いている。

明治四十四年慶應義塾に通勤する頃、私はその道すがら折々四谷の通で囚人馬車が五六台も引続いて日比谷の裁判所の方へ走つて行くのを見た。私はこれまで見聞した世上の事件の中で、この折程云ふに云はれない厭な心持のした事はなかつた。私は文学者たる以上この思想問題について黙してゐてはならない。小説家ゾラはドレフュー事件について正義を叫んだ為め国外に亡命したではないか。然しわたしは世の文学者と共に何も言はなかつた。私は何となく良心の苦痛に堪へられぬやうな気がした。私は自ら文学者たる事について甚しき羞恥を感じた。以来私は自分の芸術の品位を江戸作者のなした程度まで引下げるに如くはないと思案した。その頃から私は煙草入れをさげ浮世絵を集め三味線をひきはじめた。わたしは江戸末代の戯作者や浮世絵師が浦賀へ黒船が来やうが桜田御門で大老が暗殺されやうがそんな事は下民の与り知つた事ではない——否とやかく申すのは却て畏多い事だと、すまして春本や春画をかいてゐた其の瞬間の胸中をば呆れるより寧ろ尊敬しやうと思立つたのである。(74)

ドレフュス事件に際し、ゾラが亡命覚悟で抗議の声を上げたのとは対照的に、幸徳事件を前にいかなる声も上げることができなかったことを恥辱とし、以後、芸術の品位を江戸時代の民衆作家まで引き下げることを決意したことが告白されている。いかなる政治社会問題が発生しようと、黒船が出現しても、桜田門で大老が暗殺されても、庶民のあずかり知ったことではないと開き直り、春本や春画を描いていた人々をあきれるより尊敬しようと思い立ったとする。自己嫌悪に基づく創作活動転換の決意を赤裸々かつ率直に書いた一文であった。佐藤の右

に紹介した一文が、永井のかかる小説の一節を基底に置いていることは明らかであろう。

佐藤が慶應在籍中、永井は教壇に立ちながら心中にかかる苦悩を抱えていたことになる。佐藤は、慶應の予科に入学し、永井は本科の教壇に立つ教師であったので、永井の授業を履修することはできなかった。したがって、授業を潜りで聴講する、あるいは『三田文学』を編集する永井の姿を同じ部屋で見る程度であった。[75] あくまで教師と学生の関係に止まっていたので、永井が幸徳事件をめぐり胸中に抱く葛藤を慶應在籍中に感得できるほどの関係ではなかったであろう。しかも、佐藤は大学にかよい授業を受ける模範学生ではなく、授業には殆ど出席しない放蕩学生であり、[76] 大正二年には慶應を本科に進むことなく退学している。[77] したがって、慶應を離れて以降、佐藤が永井の謦咳に接する機会はなかったが、永井の「花火」が掲載された大正八年一二月号の『改造』に、佐藤自作の「美しい町」の最終話が並んでいたことは特記しておきたい。[78] 佐藤が注目して読んだことは言うまでもないであろう。先の評論が永井の「花火」の引用部分を基底に書かれていることからも、その一節は特に印象深く佐藤の記憶に刻まれていたことがわかる。

以上のように、佐藤が敬愛した永井は、幸徳事件を契機に自らの創作活動を転換させていた。永井のように芸術の品位を下げることを決意したわけではないが、佐藤はその永井の姿を横目で見ながら、「傾向詩」から離れ、自らの内面を希求する創作へと導かれていったのであった。

結　語

佐藤春夫が幼少から青年期を経て文壇において知られるようになる時期を中心に、彼の著作を含めた足跡を概観してみた。父が医業を営む家に生を受けた佐藤は、幼少期より多くの読書をすることができる恵まれた家庭環

境にあった。加えて、生まれ故郷新宮は、文学熱が盛んで自然主義、さらには社会主義に接する機会がある街であった。そうした環境の中で成長した佐藤は、地元を訪れた有志の講演会の前座で、自然主義口調で話した内容が社会主義的と問題視され中学校を無期限停学となる。

停学処分が解除され中学卒業後の佐藤は、上京し慶應義塾の予科に入学するが、同時期に幸徳事件が発生する。佐藤が中学時代に受けた理不尽とも思える処遇は既存の教育機関への根深い不信を生み、その憤懣の情は、上京後に接したニーチェの思想の影響もあり、幸徳事件への反発を増幅させ「愚者の死」を書かせることになる。

その一方で、故郷新宮は、幸徳事件の策源地の一つと目され、刑死した大石誠之助は父と同業で面識もあっただけに、佐藤にとり事件はより身近に感得され、その恐懼は佐藤をして社会主義に接近することを抑制させ、傾向詩を書くことからも遠ざけることになる。こうした文士の志向は、佐藤が敬愛する永井荷風の足跡に準えることができた。

戦後の佐藤の回想からも、幸徳事件が佐藤の心情に与えた影響は大きく、長きにわたり残り続け傾向詩から遠ざけたことがわかるが、彼自身、社会問題に、無頓着、無関心、冷淡ではなかったことは注記すべきであろう。幸徳事件により自制された社会問題への興味と関心は、抑制要因が緩和されるなら喚起される可能性があった。この素地は、戦時における個の外側からの要請、すなわち経世経国の要請が強くなる中、創作志向の転換を容易にしたと解することができる。

そうした文人佐藤の素地は、従前の永井評価とそれが晩年に至ると覆る中で佐藤が書いた内容を通じても窺うことができる。佐藤は、永井が著した『墨東綺譚』（昭和一二年公刊）について「社会的虚偽に対する義憤、本然の人間性の愛惜追求、思ふにこの精神こそ眞のヒューニズムで、文学の大道であらう」と絶賛し[79]、敗戦前後に書かれた評においても、戦前同様に永井への敬愛の情を示していたが[80]、晩年に至ると永井は「誠のなかった人物」

であったと断じるに至る。永井を「妖人」と評しながら、自分の彼に対する敬愛の情は、「妖人」の筆の妖術に五十年惑わされてきた結果であったと悔悟し、永井崇拝熱は根底から覆り、崇拝像は粉砕されたとまで記すに至る。[81] この永井評価をめぐる変化は、永井が幸徳事件をして創作の転換をもたらしたとする「花火」の中の告白にも疑念の目を向けさせることになる。永井がゾラに傾倒したのは、その経世的文学傾向ではなく新風の好色文学をそこに発見したからだけではないかとの疑念である。最初期の一時代に経世的文学の傾向を見せたのは、文学者たることを父に納得させるための一方便ではなければ若気の誤りであったかもしれない。経世経国の文学には背を向けた貴族的エゴイスト、英雄人を欺く類の一種の気取りに過ぎず、彼の告白を正直に額面通り受け取るべきではないとまで断じていた。「花火」の中での永井の告白は、日本文学者の社会的地位の低さと無力を嘆じた一般的文明批評と見る方が適切であると、突き放す解説を加えていた。[82]

荷風を語る事は、自分の文学生涯の思い出をさらけ出すに等しいと書いていたように、佐藤が永井について書く際、永井への敬愛だけでなく、その境遇や足跡などを含めた共通点からか自己を重ねていた。[83] それだけに永井評価の変化は、幸徳事件の自らに与えた影響についての再考を迫る契機になったであろう。戦後の回想に見るように、事件への衝撃と恐懼が佐藤の創作活動に影響を及ぼしたことは明らかではあるが、晩年に至り生じた疑念、それは過度に強調され過ぎたのではないかとの自省である。佐藤は、「わたくしも初めは、傾向詩、例えば『愚者の死』などのようなものを作っていた。中学校で受けた無理解な待遇が、わたくしを反逆児にしていたのであろう。しかしながら、わたくしは日を経るに従つてわたくしの本性に返った。そうしていつころからともなくわたしの作るところは純然たる抒情詩になった。[84]（傍点筆者）」と記している。中学で受けた理不尽な処遇への反発から傾向詩を書いたものの、その後、抒情詩を専ら書くようになったのは、自らの「本姓に返った」ためとしている。佐藤は、幼少期より神経衰弱にかかりひどい憂鬱症になった経験があり[85]文壇デビュー前後にも同病を発症

していた。さらに、同棲していた米谷香代子が弟秋雄と過ちを犯し、さらには谷崎潤一郎の妻千代を譲り受ける約束が突如反故になり谷崎と絶交する（小田原事件）など、波乱万丈ともいえる佐藤の私生活に鑑みる時、彼の苦悩と葛藤は計り知れないものがあったと想像される。佐藤が、傾向詩から離れ抒情詩に傾倒するようになったのは、それが主たる要因であり、幸徳事件は中学校での理不尽な処遇への反発の延長線上に止まり、副次的要因ではなかったかとの想念である。

この自省は、戦後教育への批判に伴い生じていた戦前教育への評価の是正によっても促されたはずである。戦前の教育は、誤った指導精神があったかもしれないし、歪んだものであったかもしれないが、教師はゆるぎない信念に基づいて教えていた。生徒やＰＴＡの鼻息をうかがわなければならない現代の教師と異なり、たとえ歪んだ信念であったとしても、彼等にはバックボーンがあり自信をもって子弟を叱ることができた。「信念を持たない正しさは信念のある頑迷に劣るものであらう。わたくしは往年の間違ひのなかに興隆の気を感じ、その時代を盛世と思つて、そのなかに成長した自分を幸福に思ふ者である。たとひ間違つたものであつたとしても、信念によつて臨む者に対しては、こちらでも信念を以て対抗する気力を呼び起させる。信念と信念と鎬を削る場には生き甲斐もある。」とまで書いている。(86) 幸徳事件への憤慨は、自ら受けた教育への反発が基底に置かれていたので、後者の反発が緩和修正されるならば、前者の憤懣についての再考が図られるのは必然であろう。

以上の幸徳事件をめぐる永井評価とその変化を通じて、佐藤が文明批評に拘っていたこと、その延長線上に経世経国の文学を見て、その志を抱き続けてきたことへの自負を読み解くことができる。社会や政治問題からは超然とする創作姿勢を示していたかに見える佐藤であるが、戦時に向かう中、彼が文明批評を行いながら経世経国を志向する文士に変貌していく基底として注視すべきであろう。

（1）玉井清「日米戦争下の敵愾心昂揚についての一考察――ガダルカナル島撤退との関連で――」（『法学研究』第九二巻第一号、平成三一年一月）。

（2）玉井清「『撃ちてし止まむ』の始動」（『法学研究』第九二巻第一二号、令和元年、一二月）。

（3）玉井清「日米開戦後における詩歌の動員と競合」（『法学研究』第九四巻第一〇号、令和三年一〇月）。『毎日』の連載は、この運動が始動する同年二月二四日より記念日三日後の三月一三日まで掲載された。

（4）同右・玉井「日米開戦後における詩歌の動員と競合」

（5）玉井清「日本文学報国会結成に関する一考察」（『法学研究』第九四巻第九号、令和三年九月）。佐藤春夫「年譜・著作年表」（『定本・佐藤春夫全集・別巻1』、臨川書店、二〇〇一年、三二八頁）。この詳細な「年譜・著作年表」は、佐藤研究の基盤となる力作で、本稿執筆に際し、佐藤の著作を含めた足跡を確認する際、多くが参考になったことを特記しておきたい。なお、佐藤の全集については種々公刊されているが、最新の同全集を基本にし、以後、『佐藤春夫全集』と略す。

（6）齋藤は、二・二六事件に連座した嫌疑で収監されたが、釈放後、倉田百三、佐藤春夫、富澤有爲男、難波田春夫、松澤大平等とともに、「経国文芸の会」の立ち上げに参加し世話人になっていた。（齋藤劉「後記」〈齋藤『四天雲晴』、東京堂、昭和一七年五月、二七七頁〉）。齋藤については、玉井清「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察――〈政治と文学〉室生犀星の観察と葛藤を手掛かりにして――」（『法学研究』第九三巻第一一号、令和二年一一月）、前掲・玉井「『撃ちてし止まむ』の始動」、前掲・玉井「日米開戦後における詩歌の動員と競合」も参照のこと。

（7）中央会結成の経緯と文壇の反響については、前掲・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」。

（8）同右・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」。

（9）前掲・玉井「日本文学報国会結成に関する一考察」。

（10）同右・玉井「日本文学報国会結成に関する一考察」。

（11）例えば、日米開戦後のシンガポール陥落に先立ち、佐藤は同地に向かう日本軍を詠っているが、英国を名指しこそしていないものの侮辱し貶める扇情的文言をちりばめる詩を創作していた（前掲・玉井「日米開戦後における詩歌の動員と競合」）。

(12) 前掲・玉井「日本文学報国会結成に関する一考察」。
(13) 前掲・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」。
(14) 同右・玉井「昭和戦時文壇の苦悩についての一考察」、前掲・玉井「日米開戦後における詩歌の動員と競合」。
(15) 例えば「佐藤のやうな狷介な小説家が、事変となつては、志をのべる『賦』とか、従軍詩集とか、ペンを唾して歌ひまはるのも、ほんとのところはわからない」(菊岡久利「不思議な佐藤春夫や室生犀星」(『日本學藝新聞』昭和一五年二月二五日)との戸惑いや、佐藤は「現代流行の愛国文学の先頭に立ち経国文学の会の重要なる椅子を占むる」と揶揄する評が投げかけられていた(「文学者の道徳調査(一)佐藤春夫の巻」(『日本學藝新聞』昭和一五年四月一〇日)。
(16) 青年期の佐藤と幸徳事件との関係については種々論及されているが、山中千春『佐藤春夫と大逆事件』(論創社、二〇一六年)が詳細に追っている。本論考も同書に多くを依拠し参考にしている。
(17) 佐藤「追懐」(『中央公論』昭和三一年四、五月号〈『佐藤春夫全集・第一四巻』一六七―一八八頁〉)。
(18) 佐藤「回想」(『新潮』大正一五年、一、二、四、五、六、八、一一月の連載〈『佐藤春夫全集・第五巻、三〇七―三四六頁』〉)。前掲・佐藤「追懐」。
(19) 日露戦争開戦は翌日の号外で知り、日本軍の勝利については日記に「万歳大勝利」と書いていた(「新資料 春夫のわんぱく時代」(監修・辻本雄一、編著・河野龍也『佐藤春夫読本』(勉誠出版、二〇一五年、i頁)。日露戦争に際しては、交通不便で耕作地の乏しい熊野では、さぬき米や三州米が来なくなり外米ばかりになったこと、バルチック艦隊が通るかもしれないと遊び場の裏山に物見の塔が建てられ監視の青年が日夜見張っていたこと、旅順港開城の報が伝わると祝賀のため全町民による提灯行列が挙行されたこと、開城は勝ったか引き分けか、戦争は切り上げるべきか再開戦かをめぐり父がつかみ合いの喧嘩をしたことも回想されている(佐藤「私の履歴書」、『佐藤春夫全集。第一四巻』、二四三―二四四頁)。佐藤は一時画家を目指したことがあるように幼少期より絵を描くことが好きで、画題は金モール服の軍人や軍艦であった。軍歌を好んで歌って行進もしていたので、自分でも気づかないうちに軍国の小国民らしい空気に染まって育ったようであると、自嘲気味に回想している(佐藤「わが生ひ立ち」〈『女性改造』、大正一三年八～一一月、『佐藤全集・第五巻』、八二頁〉)。

(20) 佐藤「作家に聴く」（『文学』昭和二七年八月、第二〇巻第八号〈『佐藤春夫全集・第三五巻』〉二二二―二二七頁）。幸徳事件前後の熊野・新宮における社会主義を中心とした知的空間の特徴については、辻本雄一『熊野・新宮の「大逆事件」前後』（論創社、二〇一四年）が詳しい。

(21) 佐藤春夫『青春期の自画像』（共立書房、昭和二三年八月、一一―一二頁）。なお、明治四一年六月、赤旗事件により社会主義者が検挙され、故郷の高知に滞在していた幸徳秋水は上京することになるが、その途次、胸を病んでいたこともあり新宮の大石宅を訪ね一時身を寄せた（佐藤「日本ところどころ」（『文藝日本』昭和二九年二月〈『佐藤春夫全集・第二四巻』、二〇三―二一四頁〉）。前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』、二五頁。

(22) 父豊太郎は、文久二年一月一〇日生まれで昭和一七年三月二四日に逝去する。和歌山医学校卒業後、順天堂に学び、代々医家を継いで、新宮に熊野病院を開いた（「注」『佐藤春夫全集・第三六巻』、三七八頁）。特に狂歌は自負するところであり、日米戦争中の手帳には「勝つたびに兜の緒締め、ふんどしもしめて身動きならぬ苦しさ」と時局を揶揄する内容を書いていた（前掲・佐藤「作家に聴く」）。

(23) 前掲・佐藤「追懐」。

(24) 佐藤「わが永井荷風――その人、その文学、その他――」（『世潮』昭和二九年三月、四月、六月、七月〈『佐藤春夫全集・第二四巻』二一四―二三三頁〉）。

(25) 昭和初頭に編纂された全集に掲載された自己の年譜の中で、原級に留められた理由は代数幾何の理解が浅かったためであるが「文学書を耽溺し、放縦にして不良性生徒として懲戒する意」もあったと自己分析していた（佐藤「年譜」『現代日本文学全集二九・里見弴・四』改造社、昭和二年〈『佐藤春夫全集・第三五巻』一五頁〉）。佐藤「佐藤春夫自伝」（『現代詩人全集八・生田春月・堀口大学・佐藤春夫集』、新潮社、昭和四年〈『佐藤春夫全集・第三五巻』一八頁〉）。佐藤『詩文半世紀』（讀賣新聞社、明治三八年、一二―一三頁）。

(26) 父親からは、文学書全てを庭にたたきつけられるほどの怒りを買う（佐藤「落第祝福」〈『佐藤春夫全集・第二〇巻』三〇―三二頁〉）。このことを日中戦争後、北支に派遣される途次の昭和一三年五月七日、立寄った京城大学で同大国文学会の招きで行われた講演会の中で紹介している（「文学的身の上話」『京城日報』、昭和一三年五月一〇日夕刊、四面〈厳基権「京城だより①　佐藤春夫全集未収録資料、〈『九大日文』二〇一〇年一〇月、一六巻〉〉）。

(27) 前掲・佐藤『詩文半世紀』一三頁。『わんぱく時代』(新潮文庫、昭和六一年)二四〇頁。同書は、昭和三三年に公刊された佐藤の自伝的小説であり、作者自身「自伝的内容を持った虚構談」「根も葉もあるうそ八百」と書いている通り、その記述の利用に関しては慎重さが求められるが、後半に配された「日和山の半日」の項以降の記述は、崎山の存在を除けば、彼が書いている種々の回想と重なり、これらを基底に置いていると考えてよいであろう。

(28) 明治三二(一八九九)年、与謝野鉄幹が伝統和歌の革新を目指し結成され、機関誌『明星』を発刊し、明治中期から後期の浪漫主義を主導する。『明星』廃刊後は、『スバル』に引き継がれた。

(29) 前掲・佐藤『青春期の自画像』一二頁。

(30) 前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』三四—三五頁。

(31) 雑誌『火鞭』は、平民社に参集した社会主義系の文学者の団体「火鞭会」の機関誌で、明治三八年より三九年まで発刊された。『平民新聞』は、明治三六(一九〇三)年、萬朝報社を退社した幸徳らが平民社を立ち上げ、同年一一月より週刊で創刊され明治三八年一月まで発刊された。明治四〇年一月に日刊として復活するが三か月で廃刊になっている。

(32) 前掲・佐藤『青春期の自画像』一二—一三頁。

(33) 前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』三四—三五頁。

(34) 佐藤は「自然主義運動は、自分に偶像破壊と習俗の打破とを教えた」と回想する(「気ままな文学」『毎日新聞』、昭和二八年七月二九日〈『佐藤春夫全集・第二四巻』、一六三頁〉)。なお、この演説を敢えて「自然主義文学批評家の口吻」と表現しているが、佐藤は文学に目覚めたのは自然主義運動とほとんど歩調を一にしていたと回想しつつ(前掲・佐藤『青春期の自画像』、九頁)、自然主義文学を次のように位置づけていた。すなわち、日露戦争以後、年少気鋭の作者と批評家により推進された自然主義文学は、一般社会に対する偶像破壊と習俗打破を目指す、社会主義と並ぶ危険思想の文学と目されていた。新聞の三面記者は自然主義の名は、卑猥淫蕩の同一語として用いられてもいたとする(佐藤「明治文学史手引草」〈『慷齋雑記』、千歳書房、昭和一七年二月、一六二—一六三頁〉)。この中で、社会主義思想は「国民史的大事件」により危険視されたと婉曲に表現しているが、それが「幸徳事件」を指すことは言うまでもない。

(35) 佐藤は、自然主義と社会主義はほとんど同じようなものと誤解されていたとも解説している（前掲・佐藤『詩文半世紀』、五四―五五頁）。

(36) 前掲・佐藤『青春期の自画像』二一―二三頁。佐藤は「偽らざる告白」と題して講演、自然主義文学について気焔をあげた。山中は、当時の地元新聞二紙を調査し、佐藤の演説については両紙とも好意的に報じながらも、その一方で聴衆の中には顔をしかめる者もいたことを指摘している。さらに、佐藤はこれ以前にも中学校で授業ボイコットや校友会の演説会で「近世の大問題」と題する演説をし、先生からは危険人物として目を付けられていたこともあったので停学処分になったと考えられる（前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』、一一―一二頁）。

(37) 前掲・佐藤「年譜」。

(38) 前掲・佐藤『青春期の自画像』（一一四頁）。田舎の中学校の教育は「性来はごくすなおと自信するわたくしを完全に反逆児に仕立ててくれた」（前掲・佐藤『詩文半世紀』、一九頁）と書き、さらに「世上の所謂教育家なるものの青年子弟の心理を知らずしてその性情を傷くること甚だしきを痛感し、所謂教育なるものの有害なるを信ずるに至れり。」（前掲・佐藤「佐藤春夫自伝」）と切り捨てていた。

(39) 前掲・佐藤『詩文半世紀』一七頁。なお、佐藤が社会主義に傾倒しているとの故郷における風評は、大逆事件後に親類から養子縁組の話が持ち込まれた際に、母親が断る口実に使っていたが、それは「一種の時局便乗」と、諧謔を交え回想している（前掲・佐藤「追懐」）。

(40) 佐藤「温室」、『スバル』、明治四三年二月、『佐藤春夫全集・第二巻』、三一〇―三一一頁）。

(41) 前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』一三―一六頁。

(42) 無期停学処分を受けたことより、上級の学校へは行けない、行かなくてもよい、と考え独力で自分の文学を極める決意を固めることになる（前掲・佐藤『詩文半世紀』一七頁）。

(43) 父が自分に文学を許したのは詩人や作家などというろくでなしになる事を承認したのではなく、文学博士にするつもりであったからという（前掲・佐藤『青春期の自画像』、一二二頁）。あるいは、父親は文学の道に進むこと自体必ずしも不賛成ではなく、立派な創作をするためには、立派な学問をして自分の知識を磨かなければ大成はしないというのが口癖であったという（前掲「文学的身の上話」）。

(44) 前掲・佐藤「日本ところどころ」、前掲・佐藤「作家に聴く」、前掲・佐藤「追懐」。
(45) 前掲・佐藤『詩文半世紀』一六頁。
(46) 前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』、六〇—六一頁。石崎等「春夫と『大逆事件』——〈紀州の刻印〉」(前掲・『佐藤春夫読本』、二六六—二六七頁)。
(47) 戦後に佐藤は、田舎新聞や校友会雑誌などは別にして、自ら投稿し初めて活字になったのは、窪田空穂選で『趣味』に掲載された作品と回想している。これに先立ち石川啄木選で『明星』にも掲載されているが、それは歌会の指導者が選択の上、詠草として寄稿したものかもしれないとする(前掲・佐藤『詩文半世紀』一六頁)。佐藤は、明治四一年九月以降、『趣味』に連投している(前掲・佐藤「年譜・著作年表」)。
(48) 与謝野鉄幹は、「誠之助の死」と題する「愚者の死」に類似する詩を創作していた(前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』、三九—四五頁)。
(49) 「余の文章が始めて活字となりし時」(『文章倶楽部』大正八年五月〈『佐藤春夫全集・第三五巻』、二八五頁〉)。
(50) 前掲・佐藤「佐藤春夫自伝」。
(51) 一九歳で上京した佐藤は、末期の新詩社に加わり短歌を試みるものの専ら詩作に移ることになる。その頃の詩友は生田春月で、春月とともに生田長江先生の門に在ったから先生からハイネ、ゲーテ、ニイチェ、ブレーク、イエツなどの海外古今の詩家及詩に就て多く啓蒙されるところがあった(佐藤「詩に関する自叙伝」(『現代日本詩人全集5』、創元社、昭和二九年〈『佐藤春夫全集・第三五巻』、一九—二〇頁〉)。
(52) 佐藤が上京後に寄寓した生田長江は、ニーチェ『ツアラトウストラ』の翻訳中であり、長江の住居を「超人社」と呼んでいたが(「小説永井荷風伝」、『新潮』昭和三五年一月号〈『小説永井荷風伝・他三篇』、岩波文庫、二〇〇九年〉五一頁)、それは新詩社のような文学的結社ではなく、長江自身が自宅にかりそめに付けた名前であった(前掲・佐藤『詩文半世紀』、五一頁)。
(53) 佐藤「『日本人脱却論』の序論」(『新小説』明治四四年五月〈『佐藤春夫全集・第二二巻』、五頁〉)。「愚者の死」に対するニーチェの影響については、前掲・山中『佐藤春夫と大逆事件』(七七—八六頁)も参照のこと。
(54) 明治四五年四月一六日付・佐藤豊太郎宛佐藤春夫書簡(『佐藤春夫全集・第三六巻』、五—七頁)。前掲・山中

『佐藤春夫と大逆事件』六七―七三頁。

(55) 森鷗外が雑誌『スバル』（明治四二年七月号）に寄稿した「キタ・セクスアリス」が発禁処分になっている。

(56) 後述する徳冨健次郎の演説が物議を醸したこともあり、文部省は幸徳事件以後、管轄する学校長に対して講演会における弁士の演説が不穏当と認める時は中止させるか、其の他適当な処置をとるよう内訓も出されたことが伝えられた（『読売新聞』明治四四年二月二一日）。

(57) 一高は、文芸部主催の講演会に婦人の聴衆がいたとの理由で閉会後に塩を撒き、一般に開かれた記念祭に二、三の芸者の入場を許したことをめぐり生徒間に物論湧く、のんき非常識な学校とも断じていた（前掲・明治四五年四月一六日、佐藤豊太郎宛佐藤春夫書簡）。この官立の学校への厳しい批判には、同時代の名家の子弟の常道、旧制高等学校を経て帝国大学に進む道を放棄し、私学の慶應進学を選択したことを弁じる意図もあったであろう。

(58) 『読売新聞』は、この事件に関連して「学校の演説者招待」（明治四四年二月一〇日）「反国家的思潮」（同月一二日）と題する社説を掲載していた。前者では、学校長が演説内容を把握せずに安易に学外の者に演説をさせたことを批判し、後者では、徳冨の講演に異議を唱えず清聴した一高生を難じるとともに、そこには新聞雑誌を通じ、青年の間に破壊を志す思想が拡散されている「危険千万」な状況を見ることができると解説していた。さらに、『読売新聞』は、「問題となれる一高の解剖」と題して、同年二月二一日より四月一日まで三〇回の連載を組み、「剛健」「尚武」などの一高の校風が変質しているのではないかと批判もしていた。

(59) 校長の新渡戸は、主催者や学生に責任はなく、自らに責任があるとして進退伺いを提出したが（『読売新聞』明治四四年二月五日）、これに対し一高の寮生が文部省に、この事件は校長の関知するところでなく弁論部員の失態である旨の嘆願書を提出したことも報じられた（『読売新聞』明治四四年二月六日）。

(60) 校長の新渡戸と弁論部部長の畔柳政太郎に対し譴責処分が出され事態は収拾されることになる（『東京朝日新聞』明治四四年二月九日）。

(61) 前掲・佐藤「気ままな文学」。

(62) 前掲・佐藤春夫『わんぱく時代』二九八頁。

(63) 同右。

(64) 前掲・佐藤「作家に聴く」。
(65) 前掲・佐藤「日本ところどころ」。辻本雄一は、この回想を引用しつつ、佐藤の短編小説「砧」を糸口にして、佐藤家の歴史の中で、幸徳事件を大塩事件の延長線上に捉え、父豊太郎、さらには春夫の政治に深く関わることを抑制させた、その連関を指摘している（辻本「佐藤春夫における短編『砧』の問題」（『日本文学』五三巻九号、二〇〇四年）。
(66) 前掲・佐藤「気ままな文学」。
(67) 佐藤「自序」（『殉情詩集』、新潮社、大正一〇年七月〈『佐藤春夫全集・第一巻』五―六頁〉）。
(68) 佐藤が説明するように「傾向詩」は、広義には社会問題や政治問題を題材にした詩であるが、狭義には社会主義系、共産主義系のイデオロギーを基底に置く詩を意味することになる。
(69) 佐藤「日本文学の伝統を思ふ」（佐藤『慵齋雑記』、千歳書房、昭和一七年）七五頁。
(70) 前期・佐藤「年譜」。
(71) 佐藤「最近の永井荷風」（『文藝春秋』二四巻四号、昭和二一年六月〈『佐藤春夫全集・第二三巻』、一一頁〉）。
(72) 佐藤春夫「地の鹽―三――現代作家の社會的關心――」『東京日日新聞』昭和一一年七月一二日（『佐藤春夫全集・第二一巻』、二二一―二二四頁）。佐藤は慶應を離れて以降、永井との交流は疎遠になるが、昭和七年一一月の神代種亮の仲介による訪問を契機に永井の許に出入りするようになる。特に『永井荷風読本』（昭和一一年六月、三笠書房）編纂の責任者になったことを契機に交流することになるが、それは該評論執筆時期と重なる。なお、佐藤と永井との交流や関係については、前掲「小説永井荷風伝」の中で詳細に語られている。
(73) エミール・ゾラと永井荷風との関係、ドレフュス事件と大逆事件への両者の対応をめぐる比較考察については、菊谷和宏『「社会」のない国、日本』（講談社選書メチエ、二〇一五年）を参照のこと。
(74) 永井荷風「花火」（『改造』、大正八年十二月号）。
(75) 前掲・佐藤「わが永井荷風」。
(76) 佐藤の学生時代については、彼が四〇歳になって回想した有名な詩がある。授業に出ずに放蕩生活を送ったことを自嘲しているが、当時慶應の教壇に立っていた馬場弧蝶、戸川秋骨、永井荷風の謦咳に接したことは佐藤を鼓舞感

化したことが次のように語られている。「（前略）ひともと銀杏葉は枯れて／庭を埋めて散りしけば／冬の試験も近づきぬ／一句も解けずフランス語／若き二十のころなれや／三年がほどはかよひしも／酒、歌、烟草、また女／外に学びしこともなし／弧蝶、秋骨、はた薫／荷風が顔を見ることが／やがて我等をはげまして／よき教えともなりしのみ／／（後略）」（佐藤「酒、歌、煙草、また女――三田学生時代を唄へる歌」、『三田文学』昭和三年一月〈『佐藤春夫全集・第一巻』一二四―一二五頁〉）。

佐藤は、一高受験を放棄した理由を認めた先の父親宛書簡の中で、近代作家を目指すだけでなく、時代批評や文芸批評を行うためには深く学ぶ必要があること、学問が必要なのは自明としながらも勉強は高等学校に行かなくてもできると断じていたが（前掲・明治四五年四月一六日付・佐藤豊太郎宛佐藤春夫書簡）、深く学ぶ学問が必要なことは、前出の「文学的身の上話」の講演の中で佐藤が紹介する、父親の繰り返し説いた内容に符合している。因みに、佐藤が秀逸な著作を多数公刊していくことに鑑み、大学には真面目に通わなかったものの、独自で深く学ぶ学徒であったことは言うまでもないであろう。

(77) 殆ど授業に出なかったので、一度進級しただけで慶應本科に進むことなく廃学した（前掲・佐藤「詩に関する自叙伝」）。退学届けを出すためには保証人のお説教を受けなければならないので、月謝を滞納して退学することにした（前掲・佐藤『詩文半世紀』、三六頁）と言う。

(78) 佐藤の「美しい町」は、『改造』の大正八年の、八月号、九月号、一二月号の、計三号に分載された。因みに、この永井の「花火」と佐藤の「美しい町」の最終話が掲載された（翌九年、『美しき町』として天佑社より書籍として公刊）、大正八年一二月号の『改造』の「創作」欄には、神近市子の「村の反逆者」、沖野岩三郎の「Y教師の半生」が並んでいた。神近は、別稿において論及する甘粕事件後に佐藤が大部の回想を書く大杉栄の愛人であった。大杉が伊藤野枝に傾き、その嫉妬から切り付ける刃傷沙汰（日蔭茶屋事件）を起こし罪に問われ、出獄後初の寄稿であった。沖野は、既述のように故郷新宮に居を構え、大石誠之助に縁のあるキリスト教徒であった。したがって、同号の創作欄は、いずれも佐藤と縁のある作者が並んでいた。

(79) 佐藤「荷風先生の文学」『東京朝日新聞』昭和一二年七月一四～一六日〈前掲・佐藤『慷齋雑記』、二一二頁〉。

(80) 芥川龍之介は永井を低く評価し、佐々木茂索からは佐藤の永井評価が高すぎるのではないかとの疑念が呈されて

いた。これらの評に接しても佐藤は「荷風文学はその温雅にほどいい詠歌と、高邁な文明批評と、透徹した現実鑑賞とが、鼎の足となつてその文学魂を支え捧げてゐた」と評していた（前掲・佐藤「最近の永井荷風」）。この内、文芸批評は明治の末から淡くなっているが、内面に燃えいぶかっている、その消息は「花火」に、その名残りは創作以外の随筆や雑記に鬱勃として揺曳していると評していた。さらに「荷風と同時代に生きただけでさへ幸福であるのに、若くしてその精輝を浴びまた門を敲いて謦咳に接し不敏にして師名を辱めながらも高教をさへ受け、その作品を、も早四十年近く読みつづけてゐる幸福はわが今生の何物にもたぐひ得ない。」とまで書いていた。「最近の永井荷風」は、昭和二一年六月に公刊されたが、題目に「最近」とあるが昭和二〇年の晩春の稿であるとの佐藤による前書きが付されているので、敗戦直前に書かれた論考である。「花火」の中の告白は永井の記述に沿う理解をしていたことがわかるが、この解釈は、佐藤「永井荷風—その境涯と芸術」（『展望』一〇号、昭和二一年一〇月、一一号、同年一一月〈『佐藤春夫全集・第二三巻』、五〇頁〉）の中でも同様に、より明解に提示されている。なお、両論考は、前掲・佐藤『小説永井荷風伝、他三篇』（岩波文庫）に所収されている。

(81) 佐藤「妖人永井荷風」（前掲・佐藤『詩文半世紀』、一三五—一四〇頁）。「最近の永井荷風」の中で見た永井評価と真逆になっていた。

(82) 前掲・永井「小説永井荷風伝」。永井の作品の中で清新の気が感じられたのは舶来の異質のものだったからだけで、ゾラからの借り物で荷風の身についたものでは無かったのではあるまいかとの問題提起もしている（前掲・佐藤「わが永井荷風」）。

(83) 前掲・佐藤「最近の永井荷風」。

(84) 前掲・佐藤『詩文半世紀』、六九頁。前掲・佐藤「気ままな文学」の中では、社会悪とたたかう代りに人間の蒙昧を内面的に啓発する方向への転換は「思索の結果ではなく、自分の性情に赴くままにまかせたのである」と記してもいた。

(85) 前掲・佐藤「回想」。

(86) 前掲・佐藤「追懐」。